

公開講演会

盲僧琵琶の伝承 物語芸能と神事

——成城大学民俗学研究所蔵「盲僧琵琶の語り物」
兵藤コレクション——

兵
藤
裕
己

はじめに

盲僧（座頭、琵琶法師）と呼ばれる宗教芸能民が、この列島の社会の文化形成に果たした役割については、はやく柳田國男によって指摘されている。

柳田の初期の民俗学的著作、『毛坊主考』（大正三十四年（一九一四—一五））は、半僧半俗の毛坊主の分類として座頭と夙の者の関係を論じている。大正年間の柳田の座頭（盲僧）研究は、おもにその信仰・祭祀習俗に向けられたが、昭和期に入ると、彼らによってさまざまに「口承文芸」（フランスの民俗学者ポール・セビオが提唱した *l'art populaire orale* を訳した柳田の造語）が伝承されたことを論じた（『口承文芸史考』昭和二十年（一九四七）など）。

また、民俗信仰と芸能史の両面から盲僧を実地調査したのは、折口信夫である。とくに九州地方の盲僧に関する折口の大半年間の調査は、後述するように、現在となつては貴重な調査記録となっており、それは柳田が考察した東北地方の座頭の問題と対をなす先駆的な研究だった。

日本社会が定住と分業（＝身分制）に基礎を置く近世社会へ移行する江戸初期（一七世紀）よりも以前、この列島の社会に物語・語り物を持ち伝えたのは各種の芸能民や職人であり、それら遍歴・遊行の語り部たちの中核的な存在が、盲目の宗教芸能民である座頭や瞽女だった。

たとえば、北は東北から南は南西諸島まで、源平合戦の英雄や敗者・落人の伝説が行われる。それらの伝説や口碑は、座頭（盲僧）や瞽女（盲巫）の持ち伝えた貴種流離の物語が、在地の有力者によって家の由緒等に結び付けられた結果だろう。物語・語り物の伝播と流布に果たした盲目の宗教芸能民の役割については、柳田國男以後の日本民俗学が注目してきたところである。

口承の文芸と民間の宗教儀礼の担い手としての盲僧（座頭）は、九州地方では一九九〇年頃まで残存していた。

わたしは一九八二年（当時、大学院生）、トヨタ財団助成の盲僧琵琶の共同研究（研究代表者・藤井貞和）に加えてもらい、翌八三年からは一人で調査を行い、九州と中国地方西部に残存していた琵琶弾きの盲僧・座頭のフィールド調査を一〇年間ほど行つた。そのさい収録した百本程のビデオテープと三百本近いカセットテープは、二〇一七年度から順次デジタル化され、成城大学民俗学研究所に、「盲僧琵琶の語り物・兵藤コレクション」として収蔵される（当時の民俗学研究所長の松崎憲三氏と小島孝夫氏のご配慮・ご助力に感謝申し上げます）。

本稿は、一九九〇年代初めまで九州地方に残存した盲僧・座頭の琵琶語り伝承について紹介し、わたしの調査研究の主要なインフォーマントとなった山鹿良之（一九〇一―一九六）の物語芸能と神事を中心に、成城大学民俗学研究所に収蔵されるデジタル・コレクションの概略について紹介する。

一 盲僧（座頭）琵琶の沿革

シルクロードを経由して日本に渡来した琵琶には、大別して二つの系統があつた。一つは、畿内中央に公式ルートで伝えられた雅楽琵琶であり、もう一つは、大陸から直接九州地方に伝来した盲僧・琵琶法師の琵琶である（兵藤『琵琶法師』岩波新書、二〇〇九年）。

琵琶法師の琵琶は、携帯に便利なように、雅楽琵琶よりもひとまわり小ぶりにできている。胴にくらべて棹さきにぎりじりが太く、柱しら（柱しらとも。箏の琴柱、ギターのフレット等に相当する）の数も雅楽琵琶（四柱）よりも多い五柱じりないしは六柱じりであり、また、のちの三味線さんまいせんに引き継がれたサワリ（弦を弾いたときにピンという複雑な倍音を響かせる仕掛け）を持つ独特のつくりだが、『平家物語』等のさまざま物語を語り、祝言いわげやかま籠かま祓はらいなどの民間の宗教儀礼にたずさわつた盲僧・座頭は、一六世紀の末頃から、しだいに新しい三味線音楽に転向していった。

たとえば、文禄年間（一五九二―九五）に、琉球の三線と胡弓から三味線を考案したのは、『糸竹初心集』（寛文

四年（一六六四）成立）によれば、当道座（京都と江戸に本拠のあった平家座頭の支配組織）の石村城中検校である。石村検校の創始とされる組歌等の地唄三味線は、上方では琵琶に代わる座頭の表芸となつてゆく。

近世の語り物芸能を代表する浄瑠璃も、一六世紀までは琵琶を伴奏楽器としていたが、やがて琵琶を三味線に持ち替えた座頭によって担われてゆく。たとえば、近世初期に江戸で活躍した浄瑠璃語り薩摩浄雲は、京都の沢住検校に浄瑠璃を学んだというが、沢住検校とその師匠の虎沢検校（石村検校の門人）は、ともに琵琶を三味線に持ち替えた座頭だった（なお、「検校」は当道座の座頭を格付けする盲官の最高位）。

また、昭和三〇年代まで岩手・宮城県地方に伝わった奥浄瑠璃も、座頭・盲僧によって伝承された三味線芸であり、青森県の津軽地方で行われた津軽三味線も、昭和の名人、初代高橋竹山やその師匠の代までは、座頭の芸として行われていた（弘前市立図書館には弘前藩内の当道座関係の文書が多数所蔵される^②）。



琵琶の柱のサワリ（煤竹製）を付け替え、ヤスリで調節する山鹿良之。1988年10月。

古浄瑠璃からチョンガレ（青森ではチョンガラ）、祭文、くどき等にいたる多様な物語芸能が、近世の地方盲人によって担われていたのだが、時代の流行が琵琶から三味線へ移行したなかで、九州地方（および中国地方西部）だけは、盲僧（座頭）の琵琶が江戸時代以後も行われた。理由の一つは、盲人の琵琶演奏が、この地方では、たんなる娯楽ではなく、竈祓いや地神祭、ワタマシ（新築祝い）等の民間の宗教祭祀と密接に結びついて存在したからだ。法具としての琵琶のあり方が、三味線との交替を困難にしたのだが、芸能者が同時に宗教者でもあるという中世的な芸能伝承のあり方は、九州の

盲僧によって近代まで伝えられた。

二 盲僧琵琶研究の始まり

九州の琵琶弾きの盲僧に関して、近代になって最初に現地調査を行ったのは、折口信夫である。折口には、大正一〇年（一九二一）に「沓岐（長崎県）で行なったフィールド調査をもとに書いた「雪の島」（一九二七年）」というエッセイがあり、また「沓岐民間伝承探訪記」（一九二九年）という詳細な調査報告もある。

とくに後者では、沓岐の盲僧が「俊徳丸」「小栗判官」「石童丸」「葛の葉」「百合若大臣」「安珍」などの物語を伝承していたことを報告している。それらのうち「百合若」の物語はイチジヨと呼ばれる梓巫女によっても語られ、折口の調査に刺激された沓岐出身の山口麻太郎によって、イチジヨの語る「百合若説経」の校訂本文が作られている（山口『百合若説経』一誠社、一九三六年）。

山口が作成した「百合若説経」の本文は、その懇切な校訂作業によってイチジヨの元の語り口が少なからず失われているようだが、こんにち、沓岐を訪ねても、折口や山口が接したような「俊徳丸」「小栗判官」「葛の葉」「百合若」等を語る盲僧や盲巫は、その痕跡さえ見つけるのは難しい。しかし沓岐の対岸の九州本土では、高度経済成長期を迎える一九六〇年代まで、物語芸能と神事にたずさわる盲僧が少なからず活動していた。

わたしが九州の盲僧琵琶のフィールド調査を行ったのは、前述のように一九八二年からだが、当時はまだ何人かの盲僧・座頭によって段物（数段から成る長編の語り物）や端唄が伝承され、折口が沓岐で聴いた「俊徳丸」「小栗判官」「石童丸」「葛の葉」「安珍（道成寺）」等の段物は、熊本・福岡・鹿児島県の盲僧・座頭のあいだで語られていた（なお、盲僧と座頭という二種類の呼称については、四節に後述する）。

また、佐賀・大分・宮崎・鹿児島県でも、盲僧の藤瀬良伝、高木清玄、永田法順、上野常徳らが伝承したかまじ竈祓

い・荒神祭り関係の経文や祭文を録音・録画できたが、その折に聞いたところでは、かれらの先代または先々代の師匠の代までは、経文や祭文だけではなく、段物や端唄も演奏したという。盲僧が伝承していた段物の需要は、戦後とくに一九六〇年代の高度経済成長期以降、テレビの普及によって急速に失われていった。

また、わたしが九州の盲僧・座頭のフィールド調査をしていた一九八七年頃から、個人で持ち運び可能なビデオカメラが普及しはじめた。ビクターのコンパクトVHS（Cカセット）や、ソニーの8ミリビデオである。当時はいずれもきわめて高額だったが、ともかくそれらの機器によって個人でも演奏映像を収録できるようになり、一九八八年から、わたしは調査現場にビデオ機器を携行した。したがってわたしが収録した盲僧琵琶の演奏映像は、いずれも八八年以降に収録したものであり、まさに伝承が衰滅の一步手前にあつた時期の映像である。しかし盲僧琵琶の演奏映像は、テレビ番組等に断片的に収録されたものを除けば、数時間に及ぶ演奏をまとめて録画した映像資料集は、わたしが収録したコレクションが唯一の現存資料だろう。

録画や録音のテクノロジーは年々進歩したが、それと逆比例して伝承者の数は急速に減少していったのが一九八〇年代だった。また、六〇年代の高度成長期には、ガスコンロや電気炊飯器が全国的に普及し、九州の農村でも煮炊き用の竈はしだいに廃棄され、盲僧の神事儀礼の中核である竈祓も行われなくなった（なお、「平家」を語る琵琶法師（平家座頭）が、近世以前には地神経誦みや竈祓い等の宗教神事に携わつたことは、前掲拙著『琵琶法師』、参照）。

また、日待ちや月待ちの夜に村人が集まり、夜を徹して神前や仏前で逮夜（通夜）する夜籠もりの習俗も、かつては九州一円で行われ、その折には、「ねむけ覚まし」と称して盲僧・座頭が呼ばれ、長編の段物を夜を徹して語っていた。たとえば、盲僧琵琶コレクションに収録される「小栗判官」「俊徳丸」「隅田川」「葛の葉」「都合戦筑紫下り」等は、おもに夜籠もりに語られ、いずれも全五〜七段前後が、途中で休憩を入れて六〜七時間ほどかけて語られた。



山鹿良之(教演)の竈祓い。祭壇中央は三宝荒神御幣。和紙、細竹、マニラ苧を用いて山鹿本人が作ったもの。1989年4月6日。

だが、そんな長丁場の段物に耳を傾ける村人も、テレビやラジオの普及によっていなくなり、また竈祓いやワタマシ(新築祝い)、地神祭(荒神祭)等が行われなくなったことで、神事のあとの直会(なほひ)の余興として段物やチャリ(滑稽物、いわゆる早物語の類)が語られることもなくなった。わたしが調査に歩いた一九八〇年代はまさにそんな状況だったが、しかし長らく絶えていた竈祓いと夜籠もりの神事の一部は、山鹿がかつて活動していた地域の人びとの協力を得て再現し、御幣切りに始まる神事の一部始終を映像に収めることができた(「盲僧琵琶の語り物・兵藤コレクシヨン」映像84・85)。

筑後(福岡県南部)の柳川や大牟田周辺をおもな活動の場としていた山鹿良之は、戦前から戦後にかけて柳川市近郊に住み、有明海に面した柳川市内の漁村、浜武(はまぶけ)、崩道(くみんどう)、両開(りょうひら)などで竈祓いや家祓い、ワタマシ等の神事を行なった。また若宮神社(柳川市崩道)、天満宮(同南浜武)、大師堂(同南浜町)、観音堂(同大浜町)等での夜籠もりに呼ばれては、長丁場の段物を夜を徹して語った。わたしが調査した一九八〇年代当時、この地域ではまだ

山鹿の琵琶語りを記憶する老人が少なからずおり、一九八九年四月と一九九一年一月には、崩道集落の村人の協力と、大牟田市のカメラマン(本業はラーメン店主)の宮川光義氏の尽力により、二度にわたって崩道若宮神社での夜籠もりを再現することができた。

とくに一九九一年一月に崩道集落で行われた竈祓いと夜籠もりはドキュメンタリー映画『琵琶法師・山鹿良之』(青池憲司監督、兵藤裕己監修、一九九二年)に記録されている(この映画

は、一九九二年の公開時に毎日映画賞（ドキュメンタリー部門）を受賞し、二〇二二年のデジタル・リマスター版の再上映時にもいくつかの映画賞を受賞している。

三 民俗学研究所蔵の盲僧琵琶コレクション

わたしが九州地方の盲僧琵琶の調査をはじめたときは、伝承そのものがすでに衰滅の一步手前にあり、そのため、録画・録音資料を可能なかぎり数多く作成・保存することを第一の目的として、フィールド調査を行った（前述の演奏録画・録音のほかに、伝承者にインタビューしたテープが三百本ほどあり、いずれも現在、成城大学民族学研究所にデジタル化して収蔵される）。それらの録画・録音資料の作成は、山鹿良之以下の伝承者の年齢的な衰えが顕著になった一九九〇年代初めに一段落し、その頃になって、ようやく収録した資料を基にしたわたしの盲僧（座頭）琵琶研究も開始された次第である。³⁾

なお、わたしが収録した映像資料は、その一部はすでに公開されている。たとえば、拙著『琵琶法師』（岩波新書）には、付録として、「俊徳丸」の二段目の前半、継母の丑の刻参りの段（約二〇分）のDVDを付けた。その映像には、語りを翻字した字幕を付け、字幕にはフシ（曲節）も注記しておいた。

また、日本伝統文化振興財団製作のCD、『肥後の琵琶弾き・山鹿良之の世界』（ビクターエンターテインメント、二〇〇七年）には、わたしが収録した山鹿の「道成寺」が入っている。「道成寺」（全一段）は、わずか三〇分ほどの演奏に琵琶語りのすべてのフシが使われ、これを覚えればどんな演目でも語れるという意味で、山鹿が弟子入りした天草の座頭仲間（玉川派）では「芸がため」として特別視される演目だった（ただし、後述するような事情で、山鹿は「道成寺」を師匠からではなく、兄弟子の教楽（本名猿渡亀作）から教わっている）。

そのためCDに入れる演目として「道成寺」を選んだのだが、わたしの手元にある山鹿の十回余りの「道成寺」

演奏のなかでも、最も標準的な演奏ヴァージョン（一九八九年一月収録）を選び、語りの字起こしにはフシを注記し、琵琶語りの構成がわかるように段落ごとに番号を付した。この翻字資料を見ながら録画・録音資料を視聴することで、盲僧琵琶のすべてのフシと、琵琶語りが生成する仕組みが理解されると思う（なお、盲僧琵琶を翻字した資料集はいくつか刊行されているが、いずれも録音を字起こしただけで、フシに関する言及はない。フシを度外視して文句だけを見ても、琵琶語りと浄瑠璃・浪花節の違いもわからないだろう）。

盲僧琵琶のフシの種類と、その使われ方、またフシが語りの構成法とどのように関わるかについては、前掲「座頭琵琶の語り物伝承についての研究（一）（二）」（その簡易版は前掲拙著『平家物語の歴史と芸能』第三部、所収）で論じた。この論文には、時と場所を変えて行われた山鹿の「道成寺」の演唱例一〇種類、および複数の伝承者による「あぜかけ姫」全二段の演唱を比較した対照表が付してあるが、いずれも盲僧（座頭）琵琶の語りの可変的な部分と、不可変の部分とを明示するために作成した対照表である。これらの表によって、盲僧琵琶の物語伝承において、出し物（外題げだいたいという）の同一性を保証する不可変の部分と、即興を許容する可変的な部分とがどのような関係にあるか、口頭的なパフォーマンスの基本的な問題（その輪郭）は理解されると思う。

四 座頭と盲僧——山鹿良之の場合

ところで、筑後（福岡県南部）の柳川市・大牟田市・三池郡・山門郡・八女郡等と、肥後北部（熊本県北部）の玉名郡・山鹿市等で活動した山鹿良之から聞いた話では、とくに筑後には、「盲僧検校」（山鹿の用語で正規に得度した天台宗系の盲僧をいう）とはべつに、「門弾き」（琵琶の門付け）のみで渡世をする多くの座頭がいたという。また、山鹿が戦後二〇年ほど止住した福岡県柳川市両開の古老から聞いたところでは、山鹿のように竈祓いやワタマシ等の神事儀礼を行う座頭は「みふし語りさん」（みふしは、御節みふしとも、また三つの声音の意で三節とも）と呼ば

れ、日待ちや月待ちの夜籠もりにも呼ばれる宗教芸能者として、地域のなかでは一目置かれる存在だったという。その一方で、神事儀礼はいつさい行なわず、門付けだけで生きる物乞いの琵琶弾き座頭も少なからずいた。かれらは、柳川周辺では「どえもん」（語源は不詳）と呼ばれ、村人からは軽侮ないしは忌避される存在だったというが、そのような門付けを生業とする座頭と、神事儀礼を行う座頭・盲僧が混在した筑後地方（福岡県南部）の状況は、しかし江戸時代でも同様だったらしい。

たとえば、久留米藩の郡方下代豊田丈助が残した記録『公用見聞録』（私家版が市販される）には、随所に「平家座頭」「座頭」に関する記事がみられ、その中には、文化六年（一八〇九）十月付けの「盲僧二相成居候者、平家座頭二相成度願」等の文書が収められる。その文書にある「平家座頭」は、音曲芸能（遊芸）をもっぱらとした当道座配下の座頭である。当道座は、京都と江戸に本拠のあった平家座頭の（南北朝期以来の）支配組織であり、近世には幕府の後ろ盾を得て全国の盲人の一元的支配をめざしたため、九州地方では寺社の配下にあった盲僧座とたびたび訴訟沙汰を起こしていた。⁴

「平家座頭」と呼ばれた当道座配下の九州の座頭が、しかし近世に「平家」を語っていたとは思えない。正月の年始等で藩主の御前で演奏する一部の検校クラスの上級盲人は、武家の式楽とされた「平家」を少しは語ったろう。だが、九州地方の当道系の座頭一般は、筑後や肥後の座頭が一九八〇年代まで語っていた「牛若鞍馬下り」「卒塔婆引き」「一の谷」「小敦盛」「熊谷跡目騒動」「景清」などの古浄瑠璃系の源平合戦物を語っていた。それらの源平物が、この地方では一般に「平家」として受容されていたわけだ（なお、みぎの『公用見聞録』の記事で、盲僧があえて盲僧行をやめて座頭になった理由としては、近代にも頻繁に起こった盲僧株（檀那場の縄張り）をめぐる争いが背景にあったかと想像される）。

幼少期（四歳のとき）に左目を失明した山鹿は、小学校に行かずに新聞配達や畑仕事の手伝いをして過ごしたという。右目はかろうじて見えたので、小学校にかよう弟から文字を教えてもらったが、二十歳頃にはしだいに

右目も不自由になり、大正一二年（一九二三）、二十二歳のときに、知人のついでで天草（本渡）の座頭、江崎初太郎（芸名玉川教節）に弟子入りした。

師匠の江崎教節は、筑後大牟田の三井三池炭鉱の爆発事故で失明し、琵琶弾きの稼業に入った座頭だが、神事儀礼のたぐいは行わなかった。肥後や筑後の座頭の多くは、江戸時代には当道座の配下であり、山鹿良之が弟子入りした天草（幕府直轄の天領）の師匠も、音曲遊芸をもつぱらとした当道座（その末端）の系譜を引く座頭だった。

山鹿は弟子入りして三年ほどで師匠とけんか別れしたが、その原因は、山鹿が門付けのあがり（白米や銭）の全てを師匠に渡さなかった、いや渡したという諍いだった。なお、近世の当道座の式目では、「不忠不義の輩有るに於ては重科に処すべき事」とあり（『当道新式目』元禄五年（一六九二）、治外法権的な座の内部では、師匠に背いた座頭が簀巻きにされて川に放り込まれたという事例もある（中山太郎、注（4）の書）。

山鹿は天草の師匠のもとで門付けに必要な端唄や「小野小町」などの短い段物を教えてもらい、「菊池くずれ」「国上合戦」等の長い段物は、師匠や兄弟子が語るのを横で聞いて覚えていたという。師匠は「出し惜しみ」「教え惜しみ」をしたというのが、山鹿の口ぐせだったが、師匠の「出し惜しみ」「教え惜しみ」は、山鹿も気付いていたように、収入源である弟子を勝手に独り立ちさせないための師匠の苦肉の策だったろう。

大正一四年（一九二五）、天草の師匠とケンカ別れして郷里の玉名郡大原村（現、南関町小原）に帰った山鹿は、村人の勧めもあつて、師匠の許可を得ないまま名開き（襲名披露）をし、みずから玉川教節と名乗った（師匠からもらっていた芸名は教之^{きょうのき}）。そして郷里近辺の村々で門付け稼業をはじめたが、山鹿の父親は、それを「乞食」の業としてひどく嫌ったという。そのため実家を出た山鹿は、昭和二年（一九二七）、郷里の玉名郡に隣接する筑後（福岡県）の大牟田や柳川周辺に活動の場を移した。

とくに三井三池炭鉱の一大拠点だった大牟田は、九州でも指折りの景気の良い町であり、炭鉱町の娯楽として各種の遊芸人の需要も多かった。遊芸人仲間の互助組織として「連合遊芸組合」（妙音講）とも称した）があり、

山鹿はそこで、後述する複数の女性（瞽女や浄瑠璃語り）と知り合い、昭和四〇年頃まで筑後地方一帯と肥後北部で活動した。

山鹿のレパートリーのうち、「小栗判官」「俊徳丸」「葛の葉」「隅田川」「都合戦筑紫下り」等の長編の段物（全五〜七段を五〜六時間かけて語る）は、どれも筑後の座頭・盲僧との交流で習得した。なお、天草の師匠が語った段物は、文句を暗記して語るのでもいつも同じだったというが（この点については後述する）、大牟田で知り合った座頭、たとえば、佐々木せん太郎（芸名玉川教真）や森よいち（玉川教山）の語る段物は、語るたびに文句が違っていたという。山鹿が習得した語り口は、天草の師匠のそれではなく、筑後で知りあつた座頭仲間から習得した語り口であり、とくに森よいち（教山）からは、「小栗判官」「あぜかけ姫」「俊徳丸」「一の谷」を覚えてもらつたという。

また、筑後を活動拠点としてから、山川村（現、福岡県みやま市）のきょうぶつという晴眼の盲僧から、ワタマシ（新築祝い）で唱える「柱立て」の祭文や、御幣の切り方、供物の供え方などを覚えてもらい、また瀬高村（現、福岡県みやま市）の盲僧坂本さいちからは、竈祓いや家祓いに唱える「三十番神」「岩戸開き」などを習った。坂本さいちは、四季の土用に檀家の竈祓いにまわる天台宗盲僧派（玄清法流）の正規の盲僧だったが、盲僧が行う神事儀礼の式次第や御幣の切り方を山鹿が習得できたのは、右目がなんとか見えたからだだった（なお、かろうじて見える右目を紙に押し当てるようにして、山鹿が器用に御幣を切る様子は、竈祓いの儀礼とともに、「盲僧琵琶コレクシヨシ」映像84・85に収録される）。

神事儀礼で唱える経文とその式次第のほか、夜籠もりで語る長編の段物の多くも、筑後の盲僧・座頭との交流のなかで習得した。同業者から段物を教えてもらうときは、自分の持ちネタと交換するか、または金品を出して教えてもらったという。そのような多大な努力の結果として、山鹿は、筑後地方でいう「どえもん」ではなく、「みふし語りさん」になつたのである。

五 「肥後琵琶」の伝承者として

昭和三〇年代に父親が死去した頃から、山鹿良之は筑後（柳川市西開）の住まいと肥後（玉名郡大原村）の実家を行き来することが多くなった。そして実家では、父が残したわずかな田畑を耕すかたわら、筑後方面に琵琶弾きとして呼ばれて出かけ、また門付けに歩いて日銭を稼ぐなどしていたが、昭和四八年（一九七三）、熊本県の琵琶弾き座頭が「肥後琵琶」として国の登録無形文化財に指定されると、山鹿の生活は少なからぬ変化を被ることになる。

国指定の無形文化財は、当該地域の教育・文化行政の担当部局に、文化財の保存活動が義務づけられる。熊本県では、教育庁文化課の肝いりで「肥後琵琶保存会」が発足し、それまで一部で用いられていた「肥後琵琶」の呼称が、熊本県の文化財関係者のあいだで広く用いられるようになる。だが、明治以降に盲僧琵琶を改良して作られた筑前新式琵琶や薩摩琵琶ならともかく、九州一円で古くから行われていた盲僧（座頭）琵琶を、とくに肥後にかぎって「肥後琵琶」と呼ぶのは、たぶん縦割りの文化行政の産物だろう（なお、明治中期以降、全国的な人気を博した筑前新式琵琶や薩摩琵琶に対抗するかたちで、肥後（熊本県）では、一部の座頭がみずからの琵琶を「肥後琵琶」と称し、明治の芸能界に打って出ようとする試みがあり、それがしかし長続きしなかったらしいことは、安田宗生編「熊本県内琵琶関係新聞資料」『肥後の琵琶師』二〇〇一年、参照）。

肥後琵琶保存会では、とくに重要な三名の「肥後琵琶」伝承者の第一として、山鹿良之を指定した（ほか二名は、当時かなり高齢だった野添栄喜と西村定一）。そして後継者の育成事業が開始され、山鹿の南関町の家には、幾人かの弟子候補が入門した。しかし琵琶弾き座頭として門付け（物乞い）に歩いたような盲人の芸を、いまだきの若者が継承するなどというのは無理な話なのだ。保存会による後継者育成の試みは、一部の例外（たとえば片



朝の勤行で「三十番神」等を唱える山鹿良之。正面に稲荷神の祭壇（山鹿は頼まれると、この祭壇の前で祈祷や占いもした）、右手は、座頭の始祖皇子の小宮太子像（山鹿のいう弁財天像）1989年10月。

山旭星氏や後藤昭子氏）を除いて、成果をあげたとはいいがたい。^⑥

後継者の育成事業はともかく、圧倒的な語り芸とレパートリーの持ち主だった山鹿良之は、一九七〇年代には、熊本県で時の人のような扱いをうけ、田辺尚雄以下の邦楽研究者や地域の文化財関係者が山鹿の自宅を訪ねるようになる。そのさい、山鹿はあくまで「肥後琵琶」の伝承者として、「肥後琵琶師」ないしは「肥後琵琶弾き」といった呼称で取り上げられ、山鹿が筑後地方を主な活動の場とし、その語り芸や神事儀礼の多くも筑後の

琵琶弾きとの交流によって習得したことは、なぜか言及されることはなかった。^⑦

また、昭和四八年（一九七三）九月、肥後琵琶保存会の関係者の仲介で、山鹿は、福岡市高宮にある天台宗玄清法流（盲僧派）の本山、成就院で正式に得度し、晴れて玄清法流の「教師」に補任された（得度の戒師は成就院住職梶谷清隆師、得度後の法名は芸名と同じ教演）。それ以後、山鹿の自宅入り口には「天台宗玄清法流／南関布教所」という看板が掛けられたが、かつて筑後で活動していた当時、正規の盲僧から経文や祭文のみならず、御幣の切り方から供物の並べ方まで教えてもらった山鹿にとって、玄清法流の本山で得度して僧籍を得たことは、かなり晴れがましいことだったにちがいない。

晩年の山鹿の演奏に接した人は、黒い法衣に袈裟を

かけて演奏する姿を記憶していると思う。しかし昭和三〇年代頃の写真で見る山鹿の出で立ちは、着流しの和服姿か、正装するときも羽織姿、あるいは洋服の背広姿だった。

南関町の山鹿宅の仏壇脇の祭壇には、昭和四〇年代に知人がどこからか運んできた弁財天像が祀られていた。その弁財天像の写真は、拙著『琵琶法師』（岩波新書、二〇〇九年）の一九二ページに図版として掲げたが、その着衣の両胸には菊の紋が付いており、これは弁財天像というより、当道系の盲人が祀った座頭の始祖皇子小宮太子こみやの像だろう。熊本県教育庁の肥後琵琶保存会の事務局には、天草の座頭野添栄喜が持ち伝えた当道座の由緒書『妙音講縁起』一卷が保管されていた。その『縁起』には、光孝天皇の皇子で生まれながらの盲目の小宮太子が、諸国修行のすえに当道座の初代検校しよべいの城都じよと検校になったという始祖神話が記される。この由緒書は、かつては年一回行われた当道座の年中儀式、妙音講の席で読み上げられていたのである。⁽⁸⁾

天台宗玄清法流の正規の盲僧として得度した山鹿が、同時に、玄清法流にとつては不倶戴天の敵ともいえる当道座の始祖神を祭壇に祀り、毎朝の勤行では、その小宮太子像の前で「三十番神」や「般若心経」等の経文を誦していた（その様子も「盲僧琵琶コレクション」映像87・88に収められている）。この祭壇に祀られた小宮太子像こそ、肥後北部に生まれ育つて天草で修行し、のちに筑後地方を中心に活動した琵琶弾きの盲僧・座頭である山鹿良之の立ち位置を、まさに象徴する存在だった。

六 筑後・肥後の盲僧琵琶——高良大社蔵、覚一本『平家物語』について

筑前・筑後の玄清法流の盲僧と、肥後の当道系の座頭について、これまでやや便宜的に区分けして論じてきたが、それは両系統の盲僧・座頭が混在する筑後（福岡県南部）を主要な活動の場とした山鹿良之の微妙な立ち位置を説明しなかったからだ。だが、前掲『琵琶法師』（岩波新書）や『平家物語の歴史と芸能』第二部で詳述した

ように、そんな山鹿の立ち位置は、じつは中世以前（一六世紀以前）の琵琶法師の一般的なあり方でもあった。神事儀礼を表芸とする盲僧と、段物や端唄を生業とする座頭とが截然と区別されるようになったのは、一七世紀の後半、九州北部（筑前・筑後・肥前・豊前）の盲僧と、中央の当道座との訴訟に由来していた。

よく知られる延宝二年（一六七四）の座頭諍論では、当道座側が西国の「地神経読座頭」に全面勝訴、寺社奉行の裁定により、西国の盲僧は院号・官位・袈裟等を禁じられ、また「胡弓・三味線・筑紫琴・小歌・浄瑠璃等一切遊芸」の渡世を禁じられた（延宝三年御条目⁹）。

胡弓・三味線・筑紫琴とともに小歌・浄瑠璃とあるのは、一九八〇年代まで筑前・筑後や肥後の盲僧（座頭）が伝承していた端唄と段物をさしている。延宝二年の西国盲僧と当道座の諍論のあとも、双方からたびたびの訴状が江戸の寺社奉行に出され、いくどかの曲折をへて、一八世紀半ばには、九州北部（現在の福岡・佐賀・長崎・大分県）と中国地方西部（山口・島根県）の盲僧は、京都の青蓮院（比叡山延暦寺の門跡寺院）配下の天台宗盲僧派（玄清法流）に組み入れられた。

それに関連して注意されるのは、筑後の複数の盲僧座を管理下に置いた高良大社に、『平家物語』の覚一本が伝来したことだ。高良大社に覚一本の善本が所蔵されることは以前から知られていたが（山田孝雄『平家物語考』一九二一年）、この本の伝来経緯を明らかにしたのは、高良大社社史編纂室長を務めた古賀寿である。古賀は、高良大社本が、もとは京都曼殊院の所蔵であり、それが寛政九年（一七九七）に、青蓮院をつうじて高良社の神宮寺御井寺みいでらに下賜された経緯を「寂春手控じやくしゅん」（高良大社蔵）という文書をもとに明らかにした。

『平家物語』の定本とされる覚一本は、室町時代をつうじて「覚一検校伝授之正本しやうほん」（龍門文庫蔵覚一本、宝徳四年（一四五二）奥書）として、平家座頭のあいだで秘蔵・秘伝された正本（証本）だが、それが一八世紀後半、盲僧支配を幕府に公認された青蓮院から、末寺の御井寺（高良大社）に下賜された事実はきわめて興味深い。盲僧を管理した寺社が『平家物語』を所持した例は、長門の阿弥陀寺（現、赤間神宮）に伝来した長門本をはじめと

して、多くの事例があげられる。そのことが、じつは比叡山周辺で編纂された『平家物語』の成立問題にも直結することは、前掲の拙著・拙論などでくり返し述べた問題なので、ここでは措く。

京都青蓮院を本寺とする天台宗盲僧派（玄清法流）に組み入れられた九州北部の盲僧にたいして、九州南部（鹿児島県の薩摩・大隅地方）の盲僧は、すでに近世初頭から、薩摩藩の強力な統制下のもと、薩摩日置（鹿児島県日置市）の盲僧寺常楽院の配下とされ、日向地方の盲僧も（都城以外は薩摩藩領ではないが）常楽院配下に組み入れられた。

そのような九州北部（大分県以北）の玄清法流と南部の常楽院流にたいして、中間地域の肥後（熊本県）と筑後・筑前南部（福岡県）には、宗門統制の網に組み入れられない座頭・盲僧が少なからず活動していた。

たとえば、福岡県の郷土史家永井彰子は、福岡藩の在郷武士加藤正房が記した『正房日記』をもとに、延宝・寛文頃（一七世紀後半）の筑前朝倉郡（現・朝倉市）の「座頭」が、「小歌」「浄瑠璃」「稽」などを芸としていたことを述べている。「小歌」は端唄であり、「浄瑠璃」は段物であり、「稽」は、筑後や肥後の盲僧（座頭）が一七八〇年代まで伝承していたチャリである（滑稽な祝言物で、神事儀礼のあと、直会の余興の最後などに語られる。演奏時間は一〇分前後で、「酒餅合戦」「鯛の婿入り」「魚づくし」「家づくし」等々があり、「盲僧琵琶コレクション」映像83、録音28・46などに収録される）。

なお、九州地方の盲僧（座頭）琵琶の段物演奏が、一七世紀の史料で「浄瑠璃」といわれたことに関連して付言しておく。筑後・筑前や肥後の盲僧（座頭）琵琶では、端唄や段物の演奏にさいして、琵琶を三味線ふうの本調子で調弦する。すなわち、一の糸に対して二の糸は完全四度上、三の糸は二の糸の完全五度上、四の糸は三の糸の完全一度すなわち同音に調弦して、実質的には三絃（太棹三味線）の本調子である。

宮崎県延岡市の常楽院流の日向盲僧、永田法順（昭和一〇年（一九三五）生）から聞いたところでも、琵琶の調弦は、「一の糸がド、二の糸がファ、三・四の糸がオクターブ上のド」ということで、やはり本調子である。本調

子は、義太夫節や文弥節も含めた浄瑠璃一般の基本的な調弦法であり、盲僧（座頭）琵琶のやや単調な（等時拍的な）語りのテンポ・間合いは、変則的な義太夫節よりも文弥節系の古浄瑠璃に近い印象を受ける。

なお、筑後・筑前・肥後などで行われていた盲僧（座頭）琵琶には、ナガシという特徴的なフシが用いられた。端唄を歌うときの詠唱メリスマティック的な旋律であり、段物の語りだしにもしばしばナガシが用いられた。そのため、ナガシで歌われることの多い門付けの演目には、端唄のナガシのほかに、ナガシで始まる段物「小野小町」「石童丸」「あぜかけ姫」等の冒頭部分が用いられた。また、段物のばあい、道行きや年月の経過などの場面転換は必ずずといつてよいほどナガシで歌われた（前掲の「道成寺」CD翻字や「俊徳丸（部分）」DVD字幕のフシ注記を参照されたい）。

明治期に創始された近代の筑前琵琶（橘旭翁（一八四八—一九一九）が、明治二〇年代に、筑前盲僧の父から伝授された盲僧琵琶を改良して創始した筑前新式琵琶であり、現在も九州北部を中心に広く行われる）では、ナガシはいまも聞かせどころで使われる重要なフシである。それは浄瑠璃や浪花節にはみられない盲僧（座頭）琵琶独自の特徴的なフシといえる。

盲僧（座頭）琵琶の語りを、ほかの語り芸から区別する指標がナガシであり、したがって盲僧琵琶の翻字資料集の多くがそうであるように、語りの文句を字起こしただけでフシを明記しなければ、盲僧琵琶と浄瑠璃・浪花節の区別も消え失せてしまう（昭和三〇年代に山鹿良之の演奏を聴いたある高名な国文学者（平家物語研究者でもある）は、山鹿の演奏を聴いて、まったく浪花節のようだったと記している。しかし浪花節を聴いたことのある人なら、山鹿の演奏が浪花節とは似ても似つかないことは容易にわかるはずなのだ）。

ところで、一九七〇年代に熊本県立盲学校の校長を務めた平川穆の調査によれば、熊本県の座頭（盲僧）琵琶奏者（琵琶弾きを職業とした者）は、一九七八年の調査時点で十二名が健在だったという¹³。その後、五年たらずのあいだに半数以下となり、わたしが調査した一九八〇年代には、段物や端唄を演唱しうる座頭（盲僧）としては、山鹿良之（一九〇一年生、熊本県玉名郡南関町）、田中藤後（一九〇六年生、山鹿市）、橋口桂介（一九一五生、熊本市）、



福岡県朝倉郡の盲僧、礼楽坊国武諦浄の祭壇に祀られていた三宝荒神像。

大川進（一九一八生、鹿児島県出水市）の四名が健在であり、また晴眼盲僧では、筑前南部の森田勝浄（一九〇一年生、福岡県甘木市）が健在だった。それらの盲僧（座頭）琵琶の伝承者の詳細については、前掲論文「座頭（盲僧）琵琶の語り物伝承についての研究（一）～（三）」を参照されたい。

七 文字と語り——「平家」語りと「平曲」の問題

なお、上記の琵琶語り伝承者のうち、父親の盲僧行を継いだ晴眼盲僧の森田勝浄、その同輩の国武諦浄は、琵琶語りを習得する便宜として、父親の口述を文字に起こし、それにフシを記した台本を書き残していた。それらの琵琶語り台本が作られた経緯と、台本化にともなう語りの変質について少し説明しておく。台本が作られた経緯を知らずに、たとえば、『日本庶民生活史料集成 第十七巻』等に翻刻・収録された森田勝浄や国武諦浄の作成した台本を見る人は、語りと文字テキストとの関係について、あらぬ誤解をいだく恐れがあるからだ。

なお、語りと文字テキストとの関係の問題は、『平家物語』の現存本文（とくに寛一本以下の当道座の正本系統の本文）と「平家」語りとの関係、また近世に作られた『平家正節』等の譜本（節付け台本）と、近世に式楽化された平曲との関係を考えるうえでも、きわめて重要な問題である（前掲『平家物語の歴史と芸能』第一部、詳細は「座頭（盲僧）琵琶の語り物伝承についての研究（三）——文字テキストの成立と語りの変

質」参照。

筑前朝倉郡の盲僧森田勝浄（明治三四年（一九九一）生）は、父親の森田順光（盲人）が盲僧寺（宝山院というが家構えは通常の民家と変わらない）の住持であり、跡継ぎがいなかったため、父の跡（盲僧株）を継いだ晴眼盲僧だった。筑前や筑後には、こうした晴眼の盲僧が少なからずおり、森田勝浄の同輩の国武諦浄（朝倉郡上寺、生年は森田と同じ）も、父礼浄の盲僧寺（礼楽坊というが家構えは一般農家と同じ）を継いだ晴眼盲僧だった。

かれらの父親の森田順光や国武礼浄の段物演奏は、語るたびに文句が違っていたという。山鹿良之に多くの段物を教えた筑後の座頭、佐々木せん太郎や森よいち（いづれも盲人）と同様の口頭的な語り口だったわけだが、文字を媒介しないそのような不定形な語りを、ことばを視覚化（文字化）するのに慣れた健常者が習得するのはほぼ不可能なのだ。それはたとえば、炭鉱事故で失明して琵琶弾き稼業に入った江崎教節（山鹿の師匠）が、暗誦した同じ文句ばかりを語っていたのと同じであり、また肥後琵琶保存会が育成を試みた後継者たちが、山鹿良之の口頭的なパフォーマンスをついに習得できなかったのと同じである。

山鹿の段物演奏の口頭的構成法については、山鹿の複数回の演唱と、数人の座頭琵琶奏者の演唱を比較しながら、わたくしなりの分析結果を、前掲「座頭（盲僧）の語り物伝承についての研究（一）（二）」（簡易版は『平家物語の歴史と芸能』第三部）に論じておいたが、かつての筑前盲僧の（国武や森田の父親の代までの）オーラルな段物演奏も似たようなものだったろう。

そのような父親の盲僧行を継いだ国武諦浄と森田勝浄は、晴眼者ゆえに父親（盲人）の口頭的な語りを修得することができず、そこで両人は、修行をはじめた大正初年から、段物の文句を師匠（父親）に一句一句語ってもらい、それを書き写してフシ付けとともに暗誦したという。琵琶語りのフシ付け台本が作られたわけだが、こうした修得法は、明治二〇年代に父親の盲僧行を継ぎ、近代の筑前琵琶を創始した橘旭翁も同様だったろう（それは橘旭翁の始めた筑前新式琵琶が、琵琶語りではなく琵琶歌と称した理由でもある）。そして似たような語りの変質は、



国武諦浄（晴眼盲僧）が大正五年（1916）に作成した琵琶語り台本の一部。右から「山崎三左」「小野小町」「あぜかけ姫」。

平家座頭（琵琶法師）の語りを台本（譜本）化した近世の「平曲」にも起きたのだ。「平家正節」以下の譜本化された近世平曲が、中世の「平家」語りとはおよそ似て非なるものになり終わっていることは、わたしが繰り返し（多くの伝統邦楽研究者の反発を承知で）論じてきたことでもある。

江戸時代に幕府の式楽とされた「平曲」は、武家や文人の愛好家（晴眼者）の需要にこたえるかたちで数多くの譜本（台本）がつくられた。それにともなつて、伝統邦楽としての「平曲」の固定した語り口も成立する。そのような近世平曲のあり方を、中世の「平家」にまで遡らせて考えることはできないのだが、語りの台本化・譜本化にともなう「平曲」の変質の問題は、盲僧琵琶から近代琵琶楽の筑前琵琶が成立した経緯とまさに相似形をなしている（前掲「盲僧（座頭）琵琶の語り物伝承の研究（三）——文字テキストの成立と語りの変質」）。

父親の盲僧行を継いだ国武諦浄や森田順光が制作した台本のいくつかは、現在、その一部（原本ではなくコピー）が福岡県立図書館に所蔵され、さらにその一部が、五来重によつて（かなりランダムなかたちで）『日本庶民生活史料集成 第十七巻』（三二書房、一九七二年）に翻刻されている。フシ付け注記に少なからぬ遺漏のある翻刻であり、筑前・筑後の盲僧琵琶の語りの実態を知るのにはほぼ不可能な資料集である。なお、わたしが写真やコピーを取ることができた筑前盲僧琵琶台本の全貌と、それらが制作された経緯については、前掲論文「座頭（盲僧）琵琶の語り物伝承についての研究（三）」に詳述しておいた。

八 最後の琵琶法師、山鹿良之

以上述べてきた盲僧（座頭）琵琶の伝承者のなかで、圧倒的な量のレパートリーをもっていたのは、もっぱら琵琶語りを生業として、九〇年余りの生涯を生きた山鹿良之だった。山鹿以外の琵琶弾き座頭の多くは、ラジオ等の普及で琵琶語りを生業とするのが困難となり、戦後まもなく按摩鍼灸業などに転業していた。

また山鹿は、ほかの盲僧（座頭）琵琶奏者とちがって、同じ芸人仲間の瞽女を伴侶としていた点でも、近世以前の座頭・盲僧のあり方をうかがわせた。山鹿の伴侶や、その子どもたちについては、ややプライベートな問題に立ち入るため、山鹿の存命中に書いたわたしの論文ではふれるのを控えたが、ここでは補足的にその概略だけを述べておく。

大正一四年（一九二五）、天草の師匠とケンカ別れした山鹿は、二十四歳のとき郷里の玉名郡大原村（現、南関町小原）に帰ったが、山鹿の父親は息子が近隣で門付けに歩くのを嫌ったため、前述のように、昭和二年（一九二七）に三池炭鉱のある筑後の大牟田に活動の場をもとめた。そして大牟田の芸人の寄合組織、「連合遊芸組合」（二種の妙音講）に入ったが、そこで知り合った最初の伴侶が、イネさんという盲目の三味線弾きの瞽女だった。イネさんとのあいだに五人の子が生まれたが、そのうち四人（名前はヒデオ、トシチカ、ヒロエ、ヨシヒロ）は幼少期に死んでしまい、一人は成人して名古屋に働きに出たが（名前はノリオさん）、二十歳過ぎた頃に病で死んだという。なお、幼少期に死んだ子の一人は、遊んでいて柿の木から落ちて骨折し、病院に連れていく金がなくて家で寝かせておいたら、そのまま死んでしまったという。子どもたちの名前とそれぞれの死んだ経緯については、山鹿宅に泊まったとき（延べ日数にしたら百日以上は泊めてもらった）、夜、酒を飲みながら聞かせてもらったが、虚実皮膜のような問わず語りをしながら山鹿は涙を流していた。

その一人目の伴侶の瞽女、イネさんが昭和十五年（一九四〇）に亡くなったあと、二人目のマツエさんと一緒になった。この人は目明きの女浄瑠璃語りで、男の子が一人生まれたが、マツエさんは夜逃げしてしまったという。そしてマツエさんが失踪した後、三人目は瞽女のミツエさんで、そのミツエさんは昭和三十五年（一九六〇）に死去した。そして昭和四四年（一九六九）から一緒になったのが、最後の四人目の伴侶、瞽女のミサオさんである。

ミサオさんはわたしも会ったことがあるが、一九八六年には養護老人ホームに入ってしまった、この人の三味線や唄をわたしはついに一度も聴いていない。筑後や肥後には、かつて瞽女の三味線弾きが数多くいたが、これら九州の瞽女が伝承した唄や語り物の録音・映像資料は、残念ながら、いまはどこにも残されていないと思う。

ところで、琵琶語り一筋に生きた山鹿良之は、さきに述べたように、おびただしい量の段物のレパートリーを持っていた。わたしが題名を聞き出せたものだけでも、五〇演目ほどある。演目（外題）の詳細は、前掲『平家物語の歴史と芸能』第三部に可能なかぎり列挙しておいたが、演目に話を向けると、ああ、これも語った、あんなのも語ったと、つぎつぎに出てくる具合で、かなり根掘り葉掘り聞き出したつもりでも、けっきょくわたしにも、ついに山鹿のレパートリーの全貌はわからなかった。

以上のような次第で、盲僧（座頭）琵琶のフィールド調査の現場で、また過去の録音資料をとおして、わたしは幾人もの伝承者の演奏に接することができた。それらの琵琶語り演奏のなかでも、山鹿良之のパフォーマンスは格別だった。山鹿の多難なライフ・ヒストリーが、かれの語る「小栗判官」や「俊徳丸」の物語と重なりあう。そして六時間前後をかけて語られるその琵琶語りのパフォーマンスをとおして、まさに小栗や俊徳が復活・転生するその現場に立ち会うような、異様なリアリティを感じることにしばしばだった。

山鹿のレパートリーの全貌のつかみにくさは、その口頭的なパフォーマンスのあり方とも関連して、文字という視覚媒体（語りの時間を空間化してしまう媒体）に慣れたわたしたちにとって、まさに絶対的な他者ともいえる

盲僧（琵琶法師）という存在の本質にかかわる問題である。山鹿との十余年の付き合いは、文学研究者としてのわたしの存在を根底から襲い揺るがすような体験だったのだが、そんなわたしの琵琶法師（盲僧・座頭）論は、『琵琶法師』（岩波新書）、『平家物語の読み方』（ちくま学芸文庫）等を書いてきたことなので、それらを参照していただければ幸いである。

〔注〕

- (1) 兵藤「中世神話と諸職」、『平家物語の歴史と芸能』第二部所収、吉川弘文館、二〇〇〇年。
- (2) 兵藤「当道祖神伝承考」、注(1)の書、第二部所収。
- (3) 兵藤「座頭（盲僧）琵琶の語り物伝承の研究(一)(二)、『埼玉大学紀要・教養学部 第二六・二八巻』一九九〇—九二年、「同(三)』『成城国文学論集 第二六輯』一九九九年。どれもかなり長大な論文だが、このうち(一)(二)だけを簡易化した文章を、『平家物語の歴史と芸能』（吉川弘文館、二〇〇一年）第三部に収録した。
- (4) 中山太郎『日本盲人史』昭和書房、一九三四年、加藤康昭『日本盲人社会史研究』未来社、一九七四年、など。
- (5) 天草には、幕末まで当道座内の実効的な支配組織である「組」が、天草上組・中組・下組として存在し、その流れは、明治維新後に当道座が廃止されたあとも、「家」ないしは「派家」として存続していた。——兵藤「声の国民国家」第六章、講談社学術文庫、二〇〇九年。前掲兵藤「座頭（盲僧）琵琶の語り物伝承についての研究(二)」。
- (6) なお、薩摩琵琶奏者の後藤幸浩は、山鹿からじかに琵琶語りを習ったわけではないが、山鹿宅を数回訪ねており、またわたしが企画した琵琶の演奏会にも何回か出演してくれた。その演奏を聴いた友人の比較文学者、西成彦氏は、ジミ・ヘンドリックスのようだと感嘆していたが、たしかに後藤の演奏は、往年の山鹿が時折手すさびに弾いたインストウルメンタルの超絶技巧を想わせた。後藤は、二〇二二年に全国公開されたアニメ映画『犬王』（異端の琵琶法師と能楽師を主人公にした物語）で、琵琶をメインとする音楽を担当したが、この映画はその年のハリウッドのゴールデングローブ賞にノミネートされるなど、まさに盲僧系の琵琶の可能性を、現代に蘇らせつつある琵琶芸人

といつてよい。

- (7) 筑後(福岡県南部)と山鹿良之との関わりの深さに(例外的に)言及している調査報告として、何真智子「肥後琵琶探訪録」(『伝承文学研究』第三号、一九七二年)がある。
- (8) 一七世紀末に江戸の当道座で作られた『妙音講縁起』が、全国の当道座配下の座元に配布されていたことは、注(2)の論文に詳述した。
- (9) 中山太郎、注(4)の書、参照。
- (10) 加藤康昭、注(4)の書、参照。
- (11) 延宝三年から元禄二年(一六七五〜八九)に、筑前三奈木村(現朝倉市三奈木)の郷士、加藤正房が記した日記。『甘木市史料・近世編』一九八五年、所収。
- (12) 永井「福岡藩領における近世盲人芸能の展開」『福岡県史 近世研究編・福岡藩四』一九八三年。
- (13) 平川穆「肥後琵琶調査の経過」『肥後琵琶便り』第十二〜十三号、一九七八〜七九年。

成城大学民俗学研究所蔵「盲僧琵琶の語り物・兵藤コレクション」(二覧リスト)

一九八二年から九〇年代はじめに、わたし(兵藤)が収録・収集した盲僧琵琶コレクション(映像資料と録音資料)のリストを掲載する。

本論で述べたように、わたしがフィールド調査の現場に一人で持ち運び可能なビデオ機器を持参し、盲僧(座頭)琵琶の演奏映像を収録したのは一九八八年からである(八〇年代には、わたしは東北地方の祭文語りの芸人(祭文大夫)が伝承したデロレン祭文も数多く録音・録画しているが、ビデオに録画したのはやはり八八年からだ)。そのために、映像資料は、山鹿の琵琶語り奏者としての最晩年のものしかない。一九九〇年頃までは、調子のよ

いときは、かなり見事な演奏が行われたが、たまに手がしびれて動かないときは、調弦がうまくいかず、バチさばきも不如意というときがあった。一九九一年頃には、琵琶演奏を最小限にとどめてコトバ(コトバブシ)だけ

でストーリーを語ってしまうことも多々あった。

また録音資料は、わたし自身で録音したもののほかに、お借りしたテープをダヴィングしたものも少なくない。とくに数多くのカセットテープをお借りしたのは、大牟田市のカメラマンの宮川光義さん（本業は大牟田駅前のラーメン店主）、荒尾市役所勤務で山鹿さんにはばらく琵琶を習っていた西さん、同じく山鹿さんについて琵琶を学んでいた熊本市の中学校教員だった後藤昭子さんであり、また、公立機関としては、熊本市立博物館である。なかでも、宮川氏や西氏が所持していたカセットテープは、現在は所在不明であり、わたしがダヴィングして保管しておいた意味で「兵藤コレクション」に加えさせていただいた。

なお、映像資料のデジタル化は、「はじめに」で述べたように、成城大学民俗学研究所で二〇一七年度に行われた。また、録音資料のデジタル化とそのリスト作成は、学振の外国人特別研究員として二〇一九年度に学習院大学に在籍したサイダ・ハルミルザエヴァさんをお願いした。ハルミルザエヴァさんと、民俗学研究所の職員、林洋平さんのご尽力には感謝の言葉もない。

（学習院大学名誉教授
成城大学民俗学研究所研究員）

《映像》 盲僧琵琶の語り物・兵藤コレクション

番号	演目	撮影日	撮影場所	記録媒体	録音者	備考
1	あぜかけ姫初段	1990.3.12	山鹿宅 (南岡町小原)	Hi8	兵藤裕己撮影	
2	あぜかけ姫二段	1990.3.12	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
3	あぜかけ姫前席	1989.3.17	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
4	あぜかけ姫二席	1989.3.17	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
5	橋口桂介、あぜかけ姫初段・二段	1991.4.9	橋口宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
6	あぜかけ姫初段・二段	1991.4.10	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
7	あぜかけ姫全	1992.4.10	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
8	石童丸	1989.3.16	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
9	石童丸	1989.4.8	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
10	石童丸、端唄「梅は匂ひで」	1991.8.1	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
11	一の谷・初段	1991.11.30	荒尾市東宮内公民館	Hi8	兵藤裕己撮影	
12	一の谷・二段	1991.11.30	荒尾市東宮内公民館	Hi8	兵藤裕己撮影	
13	小栗判官初段	1989.3.15	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
14	小栗判官二段	1989.3.17	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
15	小栗判官三段	1989.3.17	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
16	小栗判官初段	1990.5.2	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
17	小栗判官二段	1990.5.3	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
18	小栗判官三段	1990.5.3	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
19	小栗判官四段	1990.5.5	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
20	小栗判官五段	1990.5.5	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
21	小栗判官六段	1990.5.6	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
22	小栗判官七段	1990.5.6	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
23	小栗判官初段	1990.9.13	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
24	小栗判官二段	1990.9.13	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
25	小栗判官三段	1990.9.13	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
26	小栗判官四段	1990.9.14	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
27	小栗判官五段	1990.9.14	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
28	小栗判官六段	1990.9.14	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
29	小栗判官初段・二段	1991.1.21	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
30	小栗判官三段	1991.1.22	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
31	小栗判官四段	1991.1.22	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
32	小栗判官五段・六段	1991.1.23	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
33	小栗判官初段二段	1991.11.29	山鹿市八千代座	Hi8	兵藤裕己撮影	
34	小栗判官三段	1991.12.1	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
35	小栗判官四段	1991.12.1	柳川市崩道若宮神社 (夜籠もり)	Hi8	兵藤裕己撮影	
36	小栗判官五段	1991.12.1	柳川市崩道若宮神社 (夜籠もり)	Hi8	兵藤裕己撮影	
37	小栗判官六段 (かまど祓い直会)	1991.12.2	刀塚さん宅かまど (南岡町)	Hi8	兵藤裕己撮影	
38	かまど祓い、小栗判官六段末尾	1991.12.2	刀塚さん宅かまど (南岡町)	Hi8	兵藤裕己撮影	
39	小野小町全、端唄「きにあらたま」	1990.12.20	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
40	葛の葉初段、石童丸 (冒頭)	1989.10.12	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
41	石童丸 (途中から)	1989.10.13	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
42	葛の葉二段	1989.10.14	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
43	葛の葉三段	1989.10.15	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
44	葛の葉四段	1989.10.15	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
45	葛の葉初段	1991.9.12	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
46	葛の葉二段	1991.9.12	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
47	葛の葉三段	1991.9.13	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
48	葛の葉四段	1991.9.13	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	

49	橋口桂介・葛の葉初段・二段、荒神祓い	1991.11.17	橋口宅（熊本市本町）	Hi8	兵藤裕己撮影	
50	鞍馬下り初段	1991.10.14	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
51	鞍馬下り二段	1991.10.14	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
52	鞍馬下り三段	1991.10.15	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
53	鞍馬下り四段、端唄「木綿車」	1991.10.15	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
54	俊徳丸初段～	1988.9.18	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
55	俊徳丸初段・二段	1988.9.18	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
56	俊徳丸初段～二段	1988.9.18	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
57	俊徳丸初段	1990.3.13	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
58	俊徳丸二段	1990.3.13	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
59	俊徳丸三段	1990.3.14	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
60	俊徳丸三段（語り直し）	1990.3.16	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
61	俊徳丸四段	1990.3.12	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
62	俊徳丸五段	1990.3.15	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
63	俊徳丸六段・七段	1990.3.15	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
64	俊徳丸初段	1991.4.11	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
65	俊徳丸二段	1991.4.11	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
66	俊徳丸三段	1991.4.12	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
67	俊徳丸四段	1991.4.12	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
68	俊徳丸五段・六段	1991.4.12	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
69	隅田川初段	1992.1.19	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
70	隅田川二段	1992.1.19	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
71	隅田川三段・四段	1992.1.20	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
72	卒塔婆引き初段	1991.11.18	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
73	卒塔婆引き二段	1991.11.18	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
74	道成寺全	1989.10.14	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
75	道成寺全、稽古風景	1990.3.12	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
76	日光白面退治	1990.12.19	熊本県立劇場	Hi8	兵藤裕己撮影	
77	都合戦筑紫下り（牡丹長者）初段	1989.3.18	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
78	都合戦筑紫下り（牡丹長者）二段	1989.3.18	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
79	都合戦筑紫下り（牡丹長者）初段・二段	1991.7.29	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
80	都合戦筑紫下り（牡丹長者）三段	1991.7.30	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
81	都合戦筑紫下り（牡丹長者）四段	1991.7.30	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
82	都合戦筑紫下り（牡丹長者）五段	1991.7.31	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
83	餅酒合戦（付、都合戦初段）	1992.4.10	山鹿宅	Hi8	兵藤裕己撮影	
84	(1) 山鹿良之 御幣切り(1)	1989.4.4	古賀芳郎宅（柳川市）	Cカセット	兵藤裕己撮影	84は3本で1ファイル
	(2) 御幣切り(2)	同	同	同	同	
	(3) 御幣切り(3)。更級武勇伝	同	同	同	同	
85	かまど祓い	1989.4.6	山鹿宅かまど	Cカセット	兵藤裕己撮影	
86	かまど祓い、小栗判官四段・五段	1989.4.5-6	山鹿宅かまど	VHS	ヒュー・デフエランティ撮影	
87	山鹿良之 朝の勤行	1989.3.18,8:45	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
88	山鹿良之 朝の勤行	1989.10.14	山鹿宅	Cカセット	兵藤裕己撮影	
89	山鹿「日光白面退治」、高木清玄	1990.12.19	熊本県立劇場	Hi8	兵藤裕己撮影	
90	永田法順、高木清玄、経文	1990.12.19	熊本県立劇場（昼の部）	Hi8	兵藤裕己撮影	
91	永田法順、高木清玄、経文	1990.12.19	熊本県立劇場（夜の部）	Hi8	兵藤裕己撮影	

《録音》 盲僧琵琶の語り物・兵藤コレクション

番号	テープ 番号	演目	撮影日	撮影場所	演奏者	録音者	備考
1	7--1	あぜかけ姫	1989年9月21日	—	山鹿良之	宮川光義	—
2	7--2	あぜかけ姫	1989年9月21日	—	山鹿良之	宮川光義	—
3	10--1	あぜかけ姫・二代の長者	1970年～72年	—	山鹿良之	何真知子	—
4	10--2	あぜかけ姫・二代の長者	1970年～72年	—	山鹿良之	何真知子	—
5	19--1	あぜかけ姫	1989年3月16日	—	山鹿良之	兵藤裕己	前席
6	35--1	あぜかけ姫	1989年3月17日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
7	35--2	あぜかけ姫	1989年3月17日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
8	36--1	あぜかけ姫一段・二段	11月6日	—	山鹿良之	後藤昭子	—
9	36--2	あぜかけ姫一段・二段	11月6日	—	山鹿良之	後藤昭子	—
10	76--1	あぜかけ姫・俊徳丸	1969年10月6日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
11	77--1	あぜかけ姫初段	1992年2月17日	橋口宅	橋口佳介	兵藤裕己	—
12	89--1	あぜかけ姫(村上)・難 関軍記上野合戦・実づ くし(川本)・大江山・ 羅生門(中山)・うぐい すの伊勢神宮(西村)	1963年7月31日	—	木村万作・ 川本正喜・ 中山米作・ 西村定一	熊本市立博物館	木村万作(玉名郡小田) あぜかけ姫 川本正喜(玉名郡) 関東軍記上野合 戦 中山米作(久留米) 羅生門・大江山 山鹿良之(南関) あぜかけ姫・ワタ マン 西村定一(日奈久) うぐいすの伊勢 神宮(8月15日) 川本正喜(玉名郡) 実づくし
13	89--1	あぜかけ姫(村上)・難 関軍記上野合戦・実づ くし(川本)・大江山・ 羅生門(中山)・うぐい すの伊勢神宮(西村)	1963年7月31日	—	木村万作・ 川本正喜・ 中山米作・ 西村定一	熊本市立博物館	木村万作(玉名郡小田) あぜかけ姫 川本正喜(玉名大?) 関東軍記上野 合戦 中山米作(久留米) 羅生門・大江山 山鹿良之(南関) あぜかけ姫・ワタ マン 西村定一(日奈久) うぐいすの伊勢 神宮(8月15日) 川本正喜(玉名郡) 実づくし
14	131--1	あぜかけ姫・ワタマン	1963年7月31 日・1963年8月 15日	—	山鹿良之・ 西村定一 (南関)・西 村定一(日 奈久)・川本 正喜	熊本市立博物館	山鹿良之(南関) あぜかけ姫 1963年7月31日 ワタマン(同年月 日) 西村定一(日奈久) 1963年8 月15日 川本正喜 1963年2月31 日
15	131--2	あぜかけ姫・ワタマン	1963年7月31 日・1963年8月 15日	—	山鹿良之・ 西村定一 (南関)・西 村定一(日 奈久)・川本 正喜	熊本市立博物館	山鹿良之(南関) あぜかけ姫 1963年7月31日 ワタマン(同年月 日) 西村定一(日奈久) 1963年8 月15日 川本正喜 1963年2月31 日
16	132--1	あぜかけ姫・魚づく し・牛若丸初段・二 段・ワタマン	1955年頃	—	北村万作・ 上田義視・ 山鹿良之	—	あぜかけ姫・魚づくし(北村万作 (玉川屋学)・八代郡) 牛若丸初段・二段(上田よしみ・水 俣市) ワタマン(山鹿良之)
17	132--2	あぜかけ姫・魚づく し・牛若丸初段・二 段・ワタマン	1955年頃	—	北村万作・ 上田よし み・山鹿良 之	—	あぜかけ姫・魚づくし(北村万作 (玉川屋学)・八代郡) 牛若丸初段・二段(上田よしみ・水 俣市) ワタマン(山鹿良之)
18	108--1	敦盛一段	—	—	—	—	—
19	48--1	雨乞の語り・道成寺の 語り・節の説明・俊徳 丸・あぜかけ姫②	1982年7月27日	—	山鹿良之	—	—
20	37--1	石童丸・荒尾からの巡 礼の一行・般若心経	10月9日	山鹿宅	山鹿良之	木村理郎	—
21	37--2	石童丸・荒尾からの巡 礼の一行・般若心経	10月9日	山鹿宅	山鹿良之	木村理郎	—
22	38--1	石童丸後半・小野小町	1985年頃	—	山鹿良之	後藤昭子	—
23	38--2	石童丸後半・小野小町	1985年頃	—	山鹿良之	後藤昭子	—

24	74--1	石童丸・一花ひらいて・正月端唄	1983年8月4日	—	橋口佳介	—	B面なし
25	137--1	石童丸	1989年2月25日	文化会館	山鹿良之	木村理郎	—
26	138--1	石童丸	1989年3月16日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
27	138--2	石童丸	1989年3月16日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
28	6--1	一ノ谷・餅酒合戦	—	—	西村教山	—	—
29	6--2	一ノ谷・餅酒合戦(ワタマシ)	—	—	西村教山	—	—
30	45--1	一ノ谷・あぜかけ姫・小栗判官	—	—	山鹿良之	—	テープ不良。他の録音の音と重なっている
31	45--2	一ノ谷・あぜかけ姫・小栗判官	—	—	山鹿良之	—	テープ不良。他の録音の音と重なっている
32	84--1	一ノ谷(森田喬)・一ノ谷(猿渡寅松)・正月祝唄(堀田虎造)・紀州焼山騒動	1963年8月15日	—	森田勝浄・猿渡寅松・堀田虎造	熊本市立博物館	—
33	94--1	一ノ谷初段	1989年4月4日	古賀芳郎氏宅	—	兵藤裕己	—
34	104--1	一ノ谷	—	—	西村教山・猿渡虎松	—	A 面西村教山 一ノ谷 B 面猿渡虎松(八代の人) 一ノ谷
35	105--1	一ノ谷	1983年	柳川市崩道観音堂	山鹿良之	宮川光義	一ノ谷(柳川崩道観音院)・都合戦筑紫下り(宮川氏のお母さん宅)
36	106--1	一ノ谷・熊谷跡目騒動(1985年)・餅酒合戦・山崎三左(1986年)	1986年4月2日・1985年9月25日	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
37	107--1	一ノ谷初段・二段	—	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
38	109--1	一ノ谷初段	1984年9月19日	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
39	110--1	一ノ谷二段	1984年10月10日	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
40	111--1	一ノ谷初段	1990年5月14日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
41	112--1	一ノ谷	1984年4月4日	川柳市南浜武古賀芳郎宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
42	113--1	一ノ谷初段・二段(途中まで)	—	—	山鹿良之	宮川光義	生目八幡
43	117--1	一ノ谷二段	1990年5月15日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	テープ111-1の続き
44	133--1	一ノ谷	1989年4月4日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
45	133--2	一ノ谷	1989年4月4日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
46	8--1	魚づくし	1986年4月2日	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
47	39--1	牛若蔵馬下り(卒塔婆引き)	—	—	山鹿宅	宮川光義	—
48	39--2	牛若蔵馬下り(卒塔婆引き)	—	—	山鹿宅	宮川光義	—
49	41--1	牛若蔵馬下り(卒塔婆引き)	1984年10月11日	山鹿宅	—	宮川光義	南関公民館1984年6月
50	41--2	牛若蔵馬下り(卒塔婆引き)	1984年10月11日	山鹿宅	—	宮川光義	南関公民館1984年6月
51	11--1	鳥帽子折・倉橋伝助・野菜づくし・豊後浄瑠璃・餅酒合戦	1955年?	—	野添栄喜	熊本市立博物館	昭和30年代
52	11--2	鳥帽子折・倉橋伝助・野菜づくし・豊後浄瑠璃・餅酒合戦	1955年?	—	野添栄喜	熊本市立博物館	昭和30年代
53	114--1	大江山初段	1982年10月-12月頃	南関町公民館	山鹿良之	宮川光義	—
54	115--1	大江山初段・二段	—	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	初段1990年5月14日 二段1990年5月16日
55	116--1	大江山二段(続き)	—	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
56	118--1	大江山初段(夜ごもり)	1989年4月4日	柳川市南浜武東・若宮神社	山鹿良之	兵藤裕己	—
57	1--1	小栗判官初段	1989年3月15日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
58	1--2	小栗判官初段	1989年3月15日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
59	2--1	小栗判官二段	1989年3月17日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
60	2--2	小栗判官二段	1989年3月17日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
61	3--1	小栗判官三段	1989年3月17日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—

62	3--2	小栗判官三段	1989年3月17日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
63	4--1	小栗判官四段	1989年4月5日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
64	4--2	小栗判官四段	1989年4月5日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
65	5--1	小栗判官他・端唄一花 ひらいて・仏事の経・ 酒餅合戦	—	—	山鹿良之	—	—
66	15--1	小栗判官一段	1979年6月27日	—	高田 馨 女、 杉本きくえ	上越市文化会館	—
67	15--2	小栗判官二段	1979年6月27日	—	高田 馨 女、 杉本きくえ	上越市文化会館	—
68	50--1	小栗判官初段・二段	1989年3月15日・17日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
69	61--1	小栗判官①	1991年1月21日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
70	49--1	小栗判官②	—	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
71	62--1	小栗判官三段・四段	1989年3月17日・1989年4月5日	—	—	兵藤裕己	小栗判官三段1989年3月17日 小栗判官四段1989年4月5日
72	139--1	小栗判官初段	1990年5月2日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
73	140--1	小栗判官二段	1990年5月2日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
74	141--1	小栗判官三段	1990年5月3日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
75	142--1	小栗判官四段	1990年5月5日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
76	143--1	小栗判官五段	1990年5月5日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
77	144--1	小栗判官六段	1990年5月6日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
78	145--1	小栗判官七段	1990年5月	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
79	146--1	小栗判官初段	1990年9月13日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
80	147--1	小栗判官二段	1990年9月13日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
81	148--1	小栗判官三段	1990年9月13日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
82	149--1	小栗判官四段	1990年9月14日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
83	150--1	小栗判官五段	1990年9月14日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
84	151--1	小栗判官六段	1990年9月14日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
84	152--1	小栗判官初段	1991年1月21日	—	山鹿良之	兵藤裕己	A 面
86	152--2	小栗判官初段	1991年1月21日	—	山鹿良之	兵藤裕己	B 面
87	153--1	小栗判官二段	1991年1月21日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
88	153--2	小栗判官二段	1991年1月21日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
89	9--1	小野小町	—	—	山鹿良之	後藤昭子	—
90	42--1	小野小町・道成寺	小野1991年11月28日・道1991年11月19日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
91	42--2	小野小町・道成寺	小野1991年11月28日・道1991年11月19日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
92	43--1	小野小町	1990年7月16日	—	山鹿良之	森阿蘇麿	—
93	44--1	小野小町	1990年12月20日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
94	52--1	小野小町・一花ひらいて (兵藤録音)・道成寺 (木村録音)	1985年7月23日・1983年5月・1982年5月	—	山鹿良之	兵藤裕己 木村理郎	小野小町1985年 端唄1983年 道成寺1982年
95	52--2	小野小町・一花ひらいて (兵藤録音)・道成寺 (木村録音)	1985年7月23日・1983年5月・1982年5月	—	山鹿良之	兵藤裕己 木村理郎	小野小町1985年 端唄1983年 道成寺1982年
96	65--1	神崎与五郎の生立初段・二段	1984年7月26日・8月9日	—	山鹿良之	後藤昭子	7月26日初段 8月9日二段
97	82--1	カマド戴い	1989年4月4日	柳江市南浜武古賀芳郎宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
98	83--1	カマド戴い	1989年4月7日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	B 面なし
99	67--1	菊池崩れ(山鹿)・都合 戦筑紫下り(田中)	1988年3月27日	山鹿市公民館	山鹿良之・ 田中藤後	木村理郎	—
100	68--1	菊池崩れ(荒尾)	1986年6月14日	—	山鹿良之	西(荒尾市役所)	—
101	69--1	菊池崩れ・都合戦筑紫 下り・口琵琶ナガシ	1982年8月13日・1982年8月3日	山鹿宅	山鹿良之	西	口琵琶(一番のナガシ・二番のナガシ) 菊池崩れ1982年8月13日・都合戦 筑紫下り1982年9月3日
102	120--1	菊池崩れ初段・二段	1974年9月26日	RKKスタジオ	山鹿良之	—	—

103	121--1	菊池崩れ三段	1974年9月26日	RKKスタジオ	山鹿良之	—	—
104	122--1	菊池崩れ四段	1974年9月26日	RKKスタジオ	山鹿良之	—	—
105	123--1	菊池崩れ(僅か)	1974年9月26日	RKKスタジオ	山鹿良之	—	—
106	124--1	菊池崩れ初段・二段	—	—	山鹿良之	宮川光義	—
107	125--1	菊池崩れ・道成寺・国上合戦	—	—	山鹿良之	宮川光義	—
108	126--1	葛の葉一段・鴨緑江節	1975年5月15日	—	高田誓女、 杉本さくえ	上越市文化会館	—
109	127--1	葛の葉二段・三段	1975年5月15日?	—	高田誓女、 杉本さくえ	上越市文化会館	日付なし
110	154--1	葛の葉	1991年9月	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
111	155--1	葛の葉初段・二段	1991年9月12日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
112	156--1	葛の葉二段・三段	1991年9月12日-13日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
113	157--1	葛の葉四段	1991年9月14日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
114	158--1	葛の葉二段・三段	1989年10月15日	—	—	兵藤裕己	—
115	73--1	源平両氏伝胃軍記三段・四段	1983年7月25日	家清館	森田勝浄	神野藤昭夫	—
116	134--1	小敦盛初段	1990年9月12日	南関町ふるさとセンター	山鹿良之	兵藤裕己	—
117	135--1	小敦盛二段	1990年9月12日	南関町ふるさとセンター	山鹿良之	兵藤裕己	—
118	136--1	小敦盛	—	—	山鹿良之	—	—
119	136--2	小敦盛	—	—	山鹿良之	—	—
120	5--2	餅酒合戦・筑前原田説法初段・二段	—	—	山鹿良之	—	—
121	63--1	更科武勇伝初段	1989年4月5日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
122	64--1	更科武勇伝二段	1989年4月5日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
123	40--1	島原巡礼末尾の段・石童丸末尾切れ	—	山鹿宅	—	宮川光義	—
124	40--2	島原巡礼末尾の段・石童丸末尾切れ	—	山鹿宅	—	宮川光義	—
125	96--1	島原巡礼初段	—	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
126	97--1	島原巡礼三段・四段	—	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
127	98--1	島原巡礼初段五段・六段	—	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
128	16--1	俊徳丸初段	1982年3月	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
129	16--2	俊徳丸二段	1982年3月	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
130	17--1	俊徳丸三段・四段	1982年3月	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
131	17--2	俊徳丸三段・四段	1982年3月	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
132	18--1	俊徳丸五段・六段	1982年3月	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
133	18--2	俊徳丸五段・六段	1982年3月	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
134	18-A--1	俊徳丸七段	1982年3月	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
135	18-A--2	俊徳丸七段	1982年3月	山鹿宅	山鹿良之	宮川光義	—
136	20--1	俊徳丸初段・二段	1990年3月13日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
137	20--2	俊徳丸初段・二段	1990年3月13日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
138	20-A--1	俊徳丸三段・四段	1990年3月14日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
139	21--1	俊徳丸三段・四段	1990年3月15日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
140	21--2	俊徳丸三段・四段	1990年3月15日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
141	22--1	俊徳丸五段・六段	1990年3月15-16日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
142	22--2	俊徳丸五段・六段	1990年3月15-16日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
143	23--1	俊徳丸七段	1990年3月16日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
144	23--2	俊徳丸七段	1990年3月16日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
145	24--1	俊徳丸初段	1988年9月18日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
146	24--2	俊徳丸二段	1988年9月18日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
147	25--1	俊徳丸初段・二段前半	1983年11月17日	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
148	25--2	俊徳丸初段・二段前半	1983年11月17日	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—

149	26--1	俊徳丸二段後半・三段前半・四段前半	1983年11月17日	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	三段前半11月23日
150	26--2	俊徳丸二段後半・三段前半・四段前半	1983年11月17日	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	三段前半11月23日
151	27--1	俊徳丸二段末尾・三段末尾・四段末尾上・石童丸・ワタマシ	1983年11月	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
152	27--2	俊徳丸二段末尾・三段末尾・四段末尾上・石童丸・ワタマン	1983年11月	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
153	28--1	俊徳丸四段末尾下・五段	1983年11月	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
154	28--2	俊徳丸四段末尾下・五段	1983年11月	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
155	29--1	俊徳丸初段	1982年9月26日	新宿文化センター	山鹿良之	兵藤裕己	—
156	29--2	俊徳丸初段	1982年9月26日	新宿文化センター	山鹿良之	兵藤裕己	—
157	30--1	俊徳丸二段	1982年9月26日	新宿文化センター	山鹿良之	兵藤裕己	—
158	30--2	俊徳丸二段	1982年9月26日	新宿文化センター	山鹿良之	兵藤裕己	—
159	31--1	俊徳丸初段	—	—	山鹿良之	—	—
160	31--2	俊徳丸初段	—	—	山鹿良之	—	—
161	32--1	俊徳丸	1970年～72年	—	山鹿良之	何真知子	—
162	32--1	俊徳丸	1970年～72年	—	山鹿良之	何真知子	—
163	33--1	俊徳丸	1982年3月22日	—	山鹿良之	兵藤裕己	—
164	34--1	俊徳丸前段(あぜかけ艇)初段・二段	1990年3月12日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
165	34--2	俊徳丸前段(あぜかけ艇)初段・二段	1990年3月12日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
166	128--1	俊徳丸一段・二段	1979年5月14日	—	高田 誓女、杉本きくえ	上越市文化会館	—
167	129--1	俊徳丸三段・四段	1979年5月14日?	—	高田 誓女、杉本きくえ	上越市文化会館	日付なし
168	99--1	柳川騒動初段	—	—	山鹿良之	宮川光義	—
169	100--1	柳川騒動初段	—	柳川老人ホーム	山鹿良之	宮川光義	—
170	101--1	柳川騒動初段・二段	—	柳川老人ホーム	山鹿良之	宮川光義	—
171	102--1	柳川騒動・一花ひらいて	1985年頃	—	山鹿良之	後藤昭子	—
172	103--1	柳川騒動・端唄	—	—	山鹿良之	木村理郎	—
173	95--1	相州児雷也	1985年2月26日	—	—	—	—
174	90--1	天竜川・ワタマシ・端唄・仏事の経・餅酒合戦・筑前原田説法I	1955年?	—	山鹿良之	熊本市立博物館	昭和30代
175	90--2	天竜川・ワタマシ・端唄・仏事の経・餅酒合戦・筑前原田説法I	1955年?	—	山鹿良之	熊本市立博物館	昭和30代
176	130--1	天竜川IV・ワタマシ・端唄・仏事の経・餅酒合戦・筑前原田I	1955年?	—	山鹿良之	熊本市立博物館	昭和30代
177	130--2	天竜川IV・新築殿(ワタマシ)・端唄・仏事の経・餅酒合戦・筑前原田I	1955年?	—	山鹿良之	熊本市立博物館	—
178	51--1	道成寺	1986年6月23日・1989年10月14日・1989年10月10日・1990年3月12日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	A 面1990年・1989年 B 面1989年10月10日・1986年6月
179	51--2	道成寺	1986年6月23日・1989年10月14日・1989年10月10日・1990年3月12日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	A 面1990年・1989年 B 面1989年10月10日・1986年6月

180	53--1	道成寺	1985年5月・1983年11月2日・1982年7月27日・1982年5月	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	A面1985年・1983年11月2日 B面1982年7月・1982年5月
181	53--1	道成寺	1985年5月・1983年11月2日・1982年7月27日・1982年5月	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	A面1985年・1983年11月2日 B面1982年7月・1982年5月
182	54--1	道成寺	1990年9月15日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
183	55--1	道成寺	1990年3月12日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
184	56--1	道成寺	1989年10月14日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
185	78--1	道成寺・筑前琵琶大楠公	1989年10月10日	熊本郵便貯金会館	山鹿良之	兵藤裕己	—
186	79--1	道成寺・菊池崩れ	1983年11月2日	南関町憩いの家	山鹿良之	宮川光義	—
187	81--1	道成寺・きよたに川	1985年5月	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
188	85--1	道成寺	1982年5月(?)	山鹿宅	山鹿良之	木村理郎	—
189	9--2	端唄・一花ひらいて	—	山鹿宅	—	後藤昭子	—
190	46--1	都合戦筑紫下り	—	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
191	46--2	都合戦筑紫下り	—	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
192	47--1	都合戦筑紫下り(山鹿・前半欠)・葛の葉(橋口)	—	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
193	47--2	都合戦筑紫下り(山鹿・前半欠)・葛の葉(橋口)	—	山鹿宅	山鹿良之	後藤昭子	—
194	57--1	都合戦筑紫下り①	—	—	山鹿良之	—	—
195	58--1	都合戦筑紫下り②	—	—	山鹿良之	—	—
196	59--1	都合戦筑紫下り初段	1989年3月18日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
197	60--1	都合戦筑紫下り二段	1989年3月17日	山鹿宅	山鹿良之	兵藤裕己	—
198	66--1	都合戦筑紫下り	1957年	—	山鹿良之	—	A面のみ
199	70--1	都合戦筑紫下り一段・二段・一花ひらいて他	1982年11月11日	—	山鹿良之	西(荒尾市役所)	止め撥・曲弾き・取り撥・乱撥
200	71--1	都合戦筑紫下り二段	1982年10月25日・1982年12月7日	—	山鹿良之	西	ノリの各種・下クリ・止め撥・差撥(1982年10月25日)
201	72--1	都合戦筑紫下り三段・四段	1983年1月11日	—	山鹿良之	西	—
202	80--1	都合戦筑紫下り一段・二段	—	—	山鹿良之	—	—
203	86--1	都合戦筑紫下り一段・二段	1974年9月27日	NHK録音	田中藤後	NHK録音	—
204	87--1	都合戦筑紫下り三段	1974年9月27日	NHK録音	田中藤後	NHK録音	—
205	88--1	都合戦筑紫下り四段	1974年9月27日	NHK録音	田中藤後	NHK録音	—
206	91--1	都合戦筑紫下り(1)	—	—	山鹿良之	—	—
207	92--1	都合戦筑紫下り(2)	—	—	山鹿良之	—	—
208	93--1	都合戦筑紫下り	1957年	—	山鹿良之	—	昭和32年
209	75--1	山崎三左	1986年4月2日	—	—	—	—
210	119--1	羅生門(大江山)	—	山鹿宅	山鹿良之	片山旭星	—
211	159--1	酒餅合戦	—	—	山鹿良之	—	—
212	159--2	酒餅合戦	—	—	山鹿良之	—	表紙に「150 上田」と記載あり
213	160--1	あぜかけ姫・魚づくし・牛若丸初段・二段・山崎三左初段・ワタマシ	—	—	北村万作・上田よしみ・山鹿良之	平川穆	あぜかけ姫(No1の続き)・魚づくし(北村万作(玉川星学)・熊本県八代郡)・牛若丸初段(上田よしみ・水俣市)表紙にNo2「神」と記載あり
214	160--2	あぜかけ姫・魚づくし・牛若丸初段・二段・山崎三左初段・ワタマシ	—	—	北村万作・上田よしみ・山鹿良之	平川穆	牛若丸二段(上田よしみ・水俣市)・山崎三左初段(?)ワタマシ(途中)(山崎三左)
215	ビデオ	肥後琵琶・RKK熊本放送 アングル'75	1975年3月6日	—	(山鹿良之)	—	—